調査実習の事例報告

社会調査と社会調査教育のあいだ

「交通インパクトの社会学的効果に関する第9次調査」を中心に

松橋達矢
日本大学文理学部 准教授

1 日大社会学と社会調査

日本大学文理学部社会学科は，わが国の私立大学における最初の社会学科として1920年に創設され，2020年に創設100年を迎える。長い研究・教育活動の歴史の中で，理論・実証・実践のいずれをも重視する学風を築きあげてきた。「強い社会学史への志向」（藤田，2000）を有しつつ，他方で「教育と研究を架橋し，大学院生・学生と教員の協働，社会調査を通して人を育てる／人が育つ教育実践」（後藤，2017）を行っていることが特徴といえよう。

社会調査士関係でいうと，2003年の社会調査士資格認定機構の創設に符節を合わせる形で，2004年に大々的なカリキュラム改訂が実施され，「社会調査士コース」が新設されたことは特筆に値する。まず1年次に「社会調査入門（A）」「データ収集・分析法入門（B）」，2年次に「社会統計学（D）」「初等多変量解析（E）」「質的分析法（F）」の主要5科目（＋コンピュータ科目）の修得を課した後，コースへのエントリーを募る。その上で，上位50名の選抜学生で構成される3年次開講科目の「社会調査実習（G）」「データ分析実習（C）」にて，少人数教育と授業間連携を徹底することで，これまで社会調査の教育効果を高めることに腐心してきた。

だが，2016年に実施されたカリキュラム改訂に伴い，本学の社会調査教育も再度大きな転換点に差し掛かっている。このことを踏まえ，本稿ではこれまでの体制を反省的に振り返る意味も込めて，私が担当した2015年度「社会調査実習」（以降「実習」と表記）をめぐる諸環境とその経緯，そして主役となる学生諸氏の学びの在り方とその成果を紹介していくこととしたい。

2 2015年度「実習」のテーマ選定の契機とその背景

2015年度の「実習」では，「交通インパクトの社会学的効果に関する研究」プロジェクトにおける第9次調査を埼玉県戸田市・旧鳩ヶ谷市にて，2クラス合同で実施した。

本学の「実習」が開講されたのは，「社会調査士コース」が創設されて2年後の2006年からであるが，調査テーマないし対象地域の選定については基本的に教員が事前に行うことが多い。これにはいくつかの理由が存在するが，その最たるものは学部学生が調査企画・設計を行うのにあたっての時間的・能力的制約であろう。「学部学生が調査の企画・設計から報告書の刊行までのすべてを一通り経験するには1年間では短すぎ」るのみならず，「とりわけ企画・設計が最も困難であり，学生任せにするとこれだけで半年程度を費やしてしまう」事実が大きい（日本大学文理学部社会学科「社会調査士コース」，2007）。さしあたりここでは，一般市民の方々を対象とした郵送法を用いての量的調査を継続的に実施する担当者のあいだで，こうした認識が

ゆるやかに共有されてきたという点のみを指摘しておきたい。

ところで本学の社会調査士コース科目の担当にあたっては，専任教員の専門性と希望に応じて予めコース内で担当科目の割り振りを議論することを常としている。「実習」については教員の負担等を加味し，2011年度から徐々にローテーション制へと移行していたが，2015年度の担当を前年6月頃に打診された際，調査テーマ選定にまずもって頭を悩ませることとなる。過去の調査経験や自身の研究テーマに近しいものをベースとしつつ，学生の関心に直結しやすいものとする方針については早めに定めていたものの，これといった考えはまとまっていなかった。そうした中でテーマ選定の契機となったのは，2015年度の「実習」をともに担当する後藤範章とともに2014年7-8月に実施した「交通インパクトの社会学的効果に関する研究」の第8次調査（ビジュアル調査）であった。

3 「交通インパクト」調査の概要：第8次調査から第9次調査へ

ここで「交通インパクトの社会学的効果に関する研究」の概要についてまとめておこう。本研究は，もともと前述の後藤が長年にわたり取り組んでいるプロジェクトである（表1）。1985年にJR埼京線が開業するまでに市域に鉄道・駅がなかった埼玉県戸田市と2005年につくばエクスプレス（TX）が開業するまで同様の状態であった同県八潮市を主たる対象地として，鉄道交通（とりわけ通勤新線）開通が地域社会構造にもたらす社会的・文化的効果を「交通インパクト」として定義し，その実証的究明を企図して1986年以降継続して調査研究が進められてきた（後藤，2017ほか）。本プロジェクトの目的を私なりにまとめると，鉄道ネットワークの変容がもたらす東京圏の生態学的地域構造変容プロセスとその内実を，5指標相互の関連性のモデル（修正MHASRモデル[1]）として説明することにある。各指標とコミュニティ研究等で採用された調査項目とを対応させる形で策定した調査票をもとに継続した調査を実施することで，鉄道・駅の開通や開設が地域社会に中・長期的にもたらすインパクトの把握・測定を企図している（図）。後藤自身による総括に従えば，第1〜7次にわたり実施された調査票調査において，5指標のあいだで影響の波及と連鎖がもたらすインパクトが確認されたものの，地域社会構造変動の様々なバリエーションとそのメカニズム解明には必ずしも到達していない。その課題を乗り越えるべく新たなアプローチを模索する中で2013年にプロジェクトの再設計と軌道修正を図り，2014年度には科研費基盤研究（B）として採択されるに至った（後藤，2015）。

「実習」での第6・7次調査実施時にティーチング・アシスタントを務めていた私が，後藤のプロジェクトに研究分担者として本格的に関わるのはこのタイミングであり，最初の調査実践がビジュアル調査に基づく第8次調査であった。この調査は，これまでの対象地域に，急きょ2001年の埼玉高速鉄道（SR）開通まで市域に鉄道・駅が存在しなかった旧鳩ヶ谷市（現川口市）を加える形で実施したものであったが，参加当初は次年度の「実習」にて実査を行うことが既定路線であったわけではない。プロジェクトの研究成果を振り返りつつ第8次調査の企画を後藤と相談する中で，私自身がもともとメガ・イベント誘致や開催と都市開発の関係性の観点から，2002年日韓W杯との関連で開通したSRに関心を有していたこと，そして同時期に「実習」担当に内定したことなどの偶発的要素が大きい。ただそれ以上に調査テーマと対象地決定に影響を及ぼしたのは，ビジュアル調査と並行して行った現地での踏査や各種ドキュメントの収集を通じ，本地域での調査計画実現に一定の手ごたえをつかむことができた点であった。

日光御成道沿いの宿場町として長い歴史を有しながら，その後は東京ではなく旧川口市のヒ

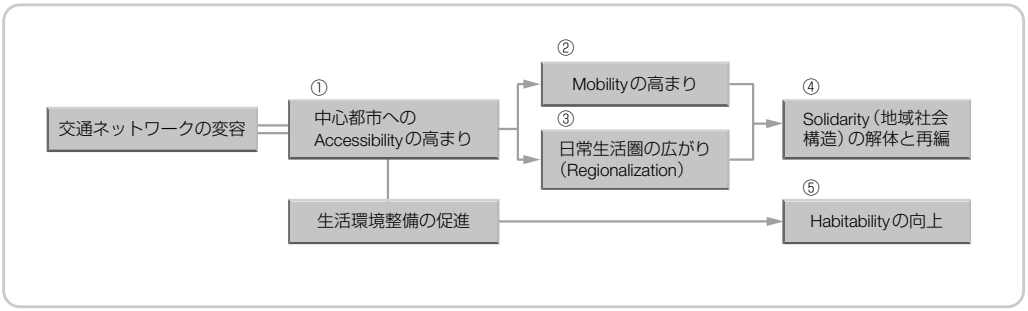
表1「交通インパクト」第1次～10次調査の概要（出典：後藤，2017：41）

	実施年度	対象地	サンプル数（抽出方法）	調査の方法	有効回収数（回収率）	備考
予備調査	1986年度	埼玉県大宮・与野・浦和・戸田市(埼京線沿線)		ビジュアル調査		
第1次調査	1987年度	埼玉県与野・戸田・八潮市	900（確率比例抽出）	留置法	618（68.6%）	調査票12頁
第2次調査	1988年度	戸田市(喜沢・本町・美女木地区)	1,100（系統抽出）	留置法	660（60.0%）	調査票10頁
第3次調査	1989年度	八潮市(八条・八潮地区)	800（系統抽出）	留置法	531（66.4%）	調査票12頁
第4次調査	1995年度	戸田市(本町・美女木地区)	900（系統抽出）	留置法	598（66.4%）	調査票8頁
第5次調査	1996年度	戸田市(本町・美女木地区)	17*1	ケース・インタビュー		
第6次調査	2007年度	戸田市(全市)	1,200（系統抽出）	郵送法*2	567（47.3%）	調査票8頁，謝品に黒と赤の水性ボールペン2本
第7次調査	2008年度	八潮市(全市)	1,200（系統抽出）	郵送法*2	593（49.4%）	調査票8頁，謝品に黒と赤の水性ボールペン2本
第8次調査	2014年度	戸田・八潮・(旧) 鳩ヶ谷市		ビジュアル調査		
第9次調査	2015年度	戸田市(全市)	1,200（系統抽出）	郵送法*3	482（40.2%）	調査票8頁，謝品に2色ボールペン1本
		(旧) 鳩ヶ谷市(全市)	1,000（系統抽出）	郵送法*3	361（36.1%）	調査票11頁，謝品に2色ボールペン1本
第10次調査	2016年度	八潮市(全市)	1,200（系統抽出）	郵送法*4	549（45.8%）	調査票8頁，謝品に黒と赤の水性ボールペン2本

＊1 第4次調査で調査票最終頁の自由回答欄に記入している284名の中から，具体的な記述をしている83名を選び出して依頼状を送付し，調査への協力を承諾した17名を対象とした。
＊2 第6次と7次の郵送調査は，角2サイズの封筒に1）A4サイズ1枚・両面印刷した依頼状，2）A4サイズ4枚に両面印刷した調査票，3）長3サイズの返信用封筒（切手を貼付），4）黒と赤の水性ボールペン2本をのし袋に入れた謝品の4点を同封して，クロネコメール便で送付。
＊3 第9次の郵送調査は，角2サイズの封筒に1）A4サイズ1枚・両面印刷した依頼状，2）戸田調査：A4サイズ4枚に両面印刷した調査票／鳩ヶ谷調査：A4サイズ6枚に両面印刷した調査票，3）長3サイズの返信用封筒（料金受取人払郵便），4）黒・赤の2色ボールペン1本をのし袋に入れた謝品の4点を同封して，ゆうメール（料金後納郵便）で送付。
＊4 第10次の郵送調査は，角2サイズの封筒に1）A4サイズ1枚・両面印刷した依頼状，2）A4サイズ4枚に両面印刷した調査票，3）長3サイズの返信用封筒（料金受取人払郵便），4）黒と赤の水性ボールペン2本をのし袋に入れた謝品の4点を同封して，ゆうメール（料金後納郵便）で送付。

写真1 鳩ヶ谷本町日光御成道沿線

写真2 SR鳩ヶ谷駅構内



①中心都市へのAccessibilityの高まり
中心都市までの時間距離＝自宅から最寄り駅までの片道所要時間＋最寄り駅から都心ターミナル駅（東京・上野・池袋・新宿・渋谷駅）までの片道所要時間／駅までの交通手段／都心部への通勤・通学率，他

②Mobilityの高まり
出生地・成育地・前住地／都内での居住歴／自市内居住歴／転居回数／モビリティタイプ（地域間移動のパターン）／階層（職業・学歴）間移動／年間転入及び転出入人口の対総合人口比／定住志向／居住形態，他

③Regionalityの高まり――日常生活圏の広がり
自市内及び自市外通勤・通学率／労働生活空間：通勤歴／消費生活空間：購買（買物）圏／社会生活空間：親交関係（交際）圏・娯楽圏／公共サービスの利用圏：医療圏，他

④Solidarityの解体と再編――社会構造（社会関係のあり方）の変動
自治会・町内会加入率／地域活動への参加率／近所づきあいの程度／インフォーマル集団の形成（親交関係量）／フォーマル集団との関わり／コミュニティ意識／埼玉人・東京人意識／ライフステージ／家族構成／平日の帰宅時間，他

⑤Habitabilityの向上
生活環境評価（自然環境・交通の便・買い物の便利さ・居住環境・町並の景観等）／現状総合評価，他

図 社会的効果測定の指標／分析（修正MHASR）モデル
（出典：後藤，1987ほか）

ンターランドとしての立ち位置を築いてきた当該地域は，市町村合併やそれに伴う集合的消費手段の不平等をめぐるコンフリクトを抱えた多様な社会層によって構成されている。ビジュアル調査で発見された景観上の分断（写真1）は，現場でであった現地住民の語りを通じて，その背後にある社会層の分断やアイデンティティ維持の困難につながりうる状況を垣間見せるなど，都市計画や都市開発，そしてまちづくりを含めた「都市づくり」の今日的課題を議論するための格好の材料を提供してくれることが予想された。同時に「交通インパクト」という観点でも，高層マンションの建設ラッシュに伴う新規住民の流入増と，SR鳩ヶ谷駅や南鳩ヶ谷駅の人通りの少なさとのあいだに横たわる矛盾をみるまでもなく（写真2），JR埼京線ともTXとも異なる地域社会構造変動のバリエーションの検討を見込める点でも大きな意義を有するものと考えた。

4 「実習」2クラスの関係性とその基本方針

この予備調査を兼ねた第8次調査の経験を通じて，2015年度の「社会調査実習」では，後藤担当の戸田調査と連携する形で，共通の調査企画・設計・方法に基づく「交通インパクトの社会学的効果に関する第9次調査」を実施することと相成った。調査対象は旧鳩ヶ谷市域全域に居住する20歳以上の男女とし，選挙人名簿抄本を閲覧しての無作為抽出（学生のサンプリング実習を念頭に系統抽出法にて実施）によって対象者1,200名を選ぶこと，2クラスとも極力同一フォーマットで依頼状・御礼兼督促状・謝品を送付すること，などが事前に申し合わされた。以降は，担当教員ならびにティーチング・アシスタントを通じて相互の実習の状況を確認しながら進めていくこととなる。

費用面については,コース設置以降にゼミ・演習・実習科目での調査やその成果報告のための費用助成を受けられる実習助成制度が新設されていたこともあり,この助成と先述した科研費を充てる形で調査費用を賄うことを基本線とした。そのため,費用上昇が見込まれる調査報告書印刷ならびに郵送関係の諸手続きについてはなるべく2クラスで一元化する方針も併せて確認された。

調査票については,プロジェクト全体の方針として極力これまでの調査項目を継承することとなったが,30年という時代の流れや,近年のソーシャル・キャピタルの議論を経由してのコミュニティ論再考のきざし等を加味する形で,他地域との比較可能性を高める努力が求められた。さらに今回私が担当する旧鳩ヶ谷市の場合,これまでプロジェクトで取り上げられた戸田市や八潮市とは異なり,開業以来継続した赤字を記録していたSRの影響のみならず,市町村合併をめぐる政治的選択の影響等を視野に入れる必要もあった。そこで,2007年度「実習」にて実施した第7次調査の調査票をベースに,地域問題の解決志向やその解決主体をめぐる意識項目を共通項目として追加しつつ,それ以外は各クラスの裁量に任せる形で項目の検討を行うこととした。これにより,それぞれの地域の実情に応じた調査項目選定のプロセスが「実習」内の授業プロセスに挿入され,学生自身が調査テーマ・対象地に積極的にコミットしていく余地が発生することとなる。

5 2015年度「実習」の流れ(1):前期

以下では,私のクラスにおける大まかなスケジュールを紹介しよう。

問題意識の共有〜調査対象地へのリアリティ獲得(4-5月)

実習の一番初めに行ったのは,問題の所在の把握と,テーマや対象地をめぐる教員と学生のあいだでの意識共有であった。今回のように教員側が大枠のテーマや問題設定,調査対象地を事前に準備している場合,学生からすると,教員の説明を通じて調査内容は「理解」できても,それを自分の問題として引き受けながら,「納得」して主体的に実習へと臨むモチベーションを獲得することは非常に困難である。

ゴールデンウィーク前の授業段階で,首都圏近隣に実家を有する学生も含め,大半の学生が旧鳩ヶ谷市へ足を運んだことも,SR利用経験がないことも判明していた。そこで連休期間に現地に足を運んでもらい,主に「実習」のテーマである「交通インパクト」の社会学的効果に関連が見込まれる写真の撮影と,現地で見聞きしたことの要約からなるタウン・ウォッチングを実施し,その成果をフォーマットに沿う形でまとめてもらうこととした。ある学生は,この段階で1時間半程度の聞き取りに成功していたが,それ以外の学生からも

「実際に当地に赴くことで,それを調べることの意義を実感することができた」

「歩道には年配の方がよく歩いていたことから,鳩ヶ谷にはあまり若者は住んでいないのでは」

「国道122号線の新道開通に合わせてロードサイドが開発され,鳩ヶ谷駅周辺だけ鉄道開業に合わせて開発されたのではないか」

「新しく流入してきた住民と鉄道開通前から住む原住民とのコミュニケーションが図られていないのではないか」

(「タウン・ウォッチング成果報告シート」より抜粋)

との声が挙がる等,各々が何らかの手ごたえをつかんだようである。

これと並行して,学生が現地へと足を運んだ中で獲得したリアリティを補強すべく,公式統計の加工・分析を通じ,旧鳩ヶ谷市域全域・町丁別の人口や世帯数,23区就業・通学者率の推移等から埼玉県全域や戸田市と比較を行い,当該地域の特徴を把握させることを試みた。最終

表2 第9次調査（旧鳩ヶ谷関連部分）における調査項目

主要項目	SRとの関わり，利用交通手段，東京人･埼玉人意識，生活環境評価， 東京との関わり，鳩ヶ谷との関わり，基本属性　ほか
追加項目	SR利用の契機，SRを利用しない理由，転居理由，地域団体･活動への参加頻度， 市町村合併への評価，他者への信頼，地域生活問題処理への意見　ほか

的には，先のタウン・ウォッチングレポートの成果と併せた簡単なグループ発表の時間を設けることで，学生自身の一定程度の「理解」と「納得」，その後の調査に必須となるチームワークの涵養につながったものと考える。

調査項目の議論と確定（5-6月）

これを踏まえて，5月下旬からは調査項目の確認と新規追加項目の議論を行うこととなる。統計からは，SR開通後から続く人口や23区就業・通学者率の増加のトレンドを通じ，東京中心部へのアクセシビリティの高まりが確認されたものの，タウン・ウォッチングからは特に昼間時間帯のSR利用の少なさと，域内での自家用車ないしバス利用の多さにより，川口市などとの結びつきも強固に維持されている状況が窺えた。

こうした点も踏まえ，学生と議論を行いながら地域の状況に応じて構成した調査項目が表の通りである（表2）。SR開通を契機として増加した子育て世帯と旧来からの居住層との意識・行動の分断が見込まれる項目を中心に，学生自身の問題関心や実感に即した形で推薦がなされ，それを教員がブラッシュアップした。最終的には11ページ立ての調査票に34の質問を設けることとなった。

サンプリング方法の見直しと調査対象者数の変更（5-7月）

調査票作成と並行して，調査対象者のサンプリングについての準備を進めるため，旧鳩ヶ谷市の編入合併先である川口市選挙管理委員会へと選挙人名簿抄本の閲覧を申請すべく，手続きを行っている最中に事件は起こる。

2015年は，くしくも埼玉県知事選が8月9日に予定されていた。この点は当初より想定済であり，事前に2クラスで相談の上，6月下旬から7月上旬のあいだでサンプリングを実施すること自体は確定していた。前年度の打診からしばらく時間の空いた5月下旬，申請書を提出する旨の連絡を入れたところ，県知事選に向けた名簿整備と準備作業の都合から転記作業スペースが限られること，さらに閲覧にあたってはタブレット端末を使用してほしいとの依頼が急きょあり，最大2名での転記作業を余儀なくされる。

最終的には，閲覧媒体が紙媒体へと再変更されたこと，抄本のナンバリングが規則的であったこと，選挙前の名簿整備作業完了後の閲覧となったこともあり，事前準備は行いやすくなった。だが，監督者である教員＋学生1名のローテーションでのサンプリング作業を考えると，期限内での1,200名の抽出が危ぶまれた。そこで急きょ対象者数を1,000名に変更しつつ，選挙区の情報等を踏まえ抽出間隔を再設定することとした。学生には上述の状況を説明し，事前に綿密なレクチャーを行った上で当日を迎えたが，学生のモチベーションの高さと選挙管理委員会側の配慮もあり，程よい緊張感の中で作業を終えることができた点は僥倖であったといえよう。

調査の実施（7-8月）

その後学生は，手分けして対象者情報をExcelシートへと入力しつつ，教員が作成・発注した調査関連資料一式の校正・確認を行い，印刷・封入と対象者への発送を見届けたところで夏季休暇へと突入する。対象者の送付先については，入力学生－それ以外の学生－教員のトリプルチェックが奏功したこと，大本となる抄本の精度の高さ等もあり，宛先不明での返送は4件に留

まった。

なお調査期間は7月20日～8月20日としていたが，今回はコスト上の理由もあり，送付には日本郵便の「ゆうメール」を使用した関係から，実際の到着日はまちまちであったようである。早いものは7月18日には投函されており，その後に送付されたものも含め最終的には363票の返送（うち有効回収数／率は361票／36.1%）が確認された。

6 2015年度「実習」の流れ（2）：後期

データの入力・クリーニング・集計（9-11月）

後期授業冒頭は，返送された封筒の開封とナンバリングにはじまり，調査票チェックとエディティングを経て，教員作成のマニュアルに基づくコーディング作業を実施した。この間に各自が担当する調査票を読み込みながら，その調査票を回答した対象者の人となりを他己紹介する，というミニ実習を挟んだが，「生の声」の一端が感じ取れたとあって，学生には非常に好評であった。複数の選択肢を組み合わせるタイプのコーディング作業とこのミニ実習は，具体的に対象者の姿をイメージしづらい量的調査において，学生がリアリティを獲得する非常に重要な契機となったようである。

データ入力とクリーニングについては，学生の作業効率や入力規則設定による入力エラー防止の観点から，まずはExcelに入力させ，学生間でのダブルチェックの後，教員が統合したものをSPSSへとインポートし，度数分布表による入力ミスの確認と，クロス集計表によるロジカルチェックを実施する。このプロセスでは，SPSSの利用方法の復習も兼ねて，データ・クリーニングの重要性をレクチャーしたが，「実習」との連携を企図した「データ分析実習」の存在もあり，操作に難渋した学生はそう多くはなかった。それでもすべての作業を実習内で完結することは難しく，カバーしきれなかった分についてはゼミの学生等をアルバイトとして動員しながらの時間外作業を余儀なくされ，教員による最終的なクリーニングを経て，データ・セットが完成したのは11月中旬であったことは付言しておく。

中間レポート作成（11月）

これと並行して学生には，単純集計結果の検討，そして自らが検証すべき仮説構成と分析の見通しからなる中間レポートを課している。

前者については，ある程度クリーニングが完了した段階で単純集計結果を出力し，①過去調査（第7次調査）の結果と比較する中で相違が発見された項目，②追加項目のうち，当該地域の現状を端的かつ特徴的に示していると考えられる項目，をそれぞれピックアップさせ，その結果を生み出す原因の考察を行わせた。これにより学生は，先行する調査結果を読み解きながら，自分たちが分析するデータと正面から向き合うことになる。なおこの作業は，ゼミ・演習・実習科目の学内外への成果公表と，学生・OB・OG・教職員の相互交流の深化を目的とした，学科主催イベント「ソシオフェスタ」での，2クラス合同の中間報告とそのアウトプット提示を兼ねていたことから，学生も真剣に取り組むことになった。

後者については，前者の作業を踏まえ，テーマと問い，理論仮説・作業仮説とその説明，関連する単純集計結果とその簡単な考察，までを網羅した，報告書執筆前の文字通りのプレ課題である。学生間での仮説の重複回避と，現段階での到達度の相互確認を企図して，この課題については学生相互でのチェックを基本とし，その理解を助けるべく教員は全員の仮説案と作成意図を表にまとめた。なお分析手法については，先述した「データ分析実習」のサポートがあるため，「実習」では報告書原稿作成に向けた先行研究の検討や仮説構成の基礎知識の復習，そしてその応用等を中心に，アドバイスすることを優先した。

3度にわたる原稿提出と報告書編集（12-2月）

この中間レポートでまとめた情報をもとに，学生は報告書原稿を執筆していくこととなるが，SRを日常的に利用しない層が全体の半数弱（49.0%）を占める当該地域の現状を読み解くにあたり，多くの学生が「入口」として設定したのは，第7次調査との差異が明確となった「定住志向」項目であった。第9次調査，とりわけ本実習が担当した旧鳩ヶ谷市では，現住地から「できれば移りたい」＋「移りたい」の総計が全体の4分の1を占めており，過去の調査結果とのコントラストがはっきりしていたことが大きい。学生のレポートからは，SRの開通が，居住形態や対象者の地域間移動のパターンとしてのモビリティタイプ，近所づきあいや地域への安堵感，町会・自治会への参加頻度といったコミュニティ関連変数を経由して，定住志向へと影響を及ぼしている様相が多かれ少なかれ浮かび上がってきた。

また追加項目としては，「地域生活問題処理への意見」項目が興味深い結果を示していた。もともとコミュニティ関連項目の見直しの流れで，都市的生活様式論に基づき新規追加された項目である。学生のレポートでは日常的な利用駅の差異に注目しつつ，SR開通がソリダリティの解体と再編を促す可能性についての言及が試みられている。私も別論文で「持家（一戸建）」内部での齟齬（そご），とりわけSR開通後の流入層の，旧来の町内会や自治会という回路を経由せず積極的に問題解決へと動く姿を指摘したが（後藤・松橋ほか，2017），修正MHASRモデルの文脈に寄せての説明可能性を軸に，引き続き検討していく必要があろう。

とはいえ，こうした知見へと学生が辿りつくまでには，多くの困難があったこともまた事実である。とりわけ変数や分析手法の選択，分析結果の解釈，SPSSの出力結果をExcelの表やグラフに置換し成形する作業を中心につまずきが見え，結果的に大半の学生が報告書完成までに2〜3回の再分析と再提出を余儀なくされた。この頑張りを支えたのは，対象者へとフィードバックを行うことへの責任感であり，資格取得に向けたモチベーションであり，実習生同士のある種の連帯感であったろう。最終的に本実習では，読みやすさを意識し，各自が仕上げた10-12ページの原稿を教員が五つのテーマに分類し，ひとまとまりの流れとなるよう配置した。対象者全員へと送付する簡易報告書に掲載する調査結果提案も含め，授業終了後も「実習」に関与し続けた学生の努力に敬意を表したい。

7 社会調査と社会調査教育を架橋する

こうして2クラスの「実習」の報告書原稿を合冊した計433ページの実習報告書は，3月下旬に完成を迎えた。学生の調査報告書原稿のみならず，「Appendix（付録）」としてコード表やサンプリングガイド，果てはプロジェクト関連論文を報告書に掲載する背景には，二つの意図が存在する。

一つ目は，当該年度の実習生の行った調査のノウハウやその知見，そして担当教員らが行った研究成果を，次年度以降の「実習」の受講生へと継承する意味合いである。2015年度の「実習」では，学生・教員ともに過去の実習報告書（主に2007年度）をたびたび参照しながら，過去の到達点の把握とその乗り越えを目指してきた。学生からすると，先輩が1年かけて作成した同一テーマに基づく報告書原稿の存在は自身が原稿を執筆する際の身近な範例としやすい。また教員からしても，選りすぐった先行研究が調査結果等と併せて掲載されていることで，プロジェクト全体の継続性を意識させながら学生を調査プロセスへと向き合わせるきっかけが作りやすい。事実，2016年度の「実習」（同一テーマで実施）においても，仮説構成や原稿執筆の参考として，この報告書が有効に活用されたようである。

二つ目は，調査対象者・協力者へのフィードバックという意味合いである。本プロジェクト

では，以前より報告書の冊子体を当該地域の図書館へと寄贈しているが，スケジュールの関係上，どうしてもまとまった成果を提示しづらい。今回の試みは，簡易報告書を送付した対象者の方からの調査結果の詳細についての問い合わせが増えている状況も鑑み，最新の研究成果を付随させることを代替案として考えた面もある。今後は現場への調査成果のフィードバックと学生への教育効果の両立という観点から，より良い方策を探っていく必要があろう。

こうして振り返ると，社会調査と社会調査教育のあいだに位置する社会調査実習という営みは，様々な難しさに直面するものの，学生・教員ともにやり切った先に存在する恩恵は非常に大きい。近年の大学における研究・教育環境の悪化と相まって，社会調査ならびに社会調査教育を取り巻く環境はますます厳しさを増しているが，調査対象地域や行政，その他の多様な主体と連携しながらこうした「灯」をともし続けていく道を今後も探っていければと考えている。

注

1）関清秀が開発事業の社会的文化的効果の測定指標として開発したMHASRモデルをもとに，「交通インパクト」を①Accessibility，②Mobility，③Regionality，④Solidality，⑤Habitability，の観点から整理したもの。詳細は後藤（2015）ならびに本稿掲載の図（73ページ）を参照のこと。

文献

藤田弘夫，2000，「日大社会学科の誕生・歩み・これから」『社会学論叢』136：23-36。

後藤範章，1987，「交通ネットワークの変容と地域社会構造変動――東京大都市圏内諸地域を事例とした第一次報告」『社会学論叢』99：72-99。

――――，2015，「都市の物理的・社会的転換を可視化・可知化する写真調査の可能性――埼京線・つくばエクスプレス・埼玉高速鉄道沿線での第8次調査から」『日本都市学会年報』48：229-238。

――――，2017，「日大社会学における実証研究の系譜――もう一つの社会調査史」『社会学論叢』188：37-56。

後藤範章・田代英美・浅川達人・小山雄一郎・松林秀樹・松橋達矢，2017（刊行予定），「新線開業の社会学的効果に関する実証的研究（2）――埼京線・SR・TXと北陸新幹線・九州新幹線を事例とする第二次報告」『日本都市学会年報』50：363-367。

日本大学文理学部社会学科「社会調査士コース」編，2007，『2006年度「社会調査実習」報告書』。

――――，2016，『2015年度「社会調査実習」報告書』。

調査実習の事例報告

メディア学とフィールド調査の接合を目指して

加藤晴明
中京大学現代社会学部 教授

1 調査デザイン――メディア学ゼミのフィールド調査

メディア社会を学びたいゼミ生を母体にした社会調査実習の場合，どのような実習のデザインが可能なのだろう。こうした問いは，たぶん他のメディア社会（学）系ゼミにも共通の悩みかもしれない。メディア分野での調査研究においては，「利用と満足度研究・情報行動研究」と，質的調査としての「コンテンツの解釈研究」という2つの研究スタイルが定番である。

私の社会調査実習は，後者のコンテンツの解釈研究・記号分析研究に，地域・暮らし・ライフストーリーなどの社会学的な要素を盛り込んだ調査デザインを模索してきたことが特色となっている。簡単に言えばメディアに関わる担い手に注目したり，記号分析に現地フィールドワークをクロスする調査実習である。社会学教育をベースにした学部のなかのゼミであること，またメディア調査を若者文化研究に限定したくないという理由からである。

学生たちにとって，社会調査実習は人生一回限りの機会なので，フィールド調査でなければ体験できないような地域の人や文化との出会いの醍醐味を味わって欲しい。その上で，そうしたヴァナキュラー（地域固有）なコンテクストのなかでメディアについて考えて欲しい。この調査デザインには，そういう意図が込められている。そのデザインは，私自身が探求してきた〈地域・文化・メディア〉を連環させるという研究方針の延長にある。

2010年からの5年間の社会調査実習では，私の研究テーマの1つであるラジオ文化やローカルラジオであるコミュニティFMの担い手調査をテーマにしてきた。地元愛知県に加えて，札幌市や函館市のラジオ局を舞台にしたインタビュー調査を試みてきた。

私は，フィールドに学生を入れて調査実習をするには，担当教員の側がそれまでの自分の実証研究を通じて調査対象の方々と信頼関係を形成し，事情がよくわかった場所で実施する方が望ましいと考えている。また，研究テーマも私の研究と関わるものであり，それまでの研究成果を学生に還元できるものを選んできた。他方で私の研究成果の押しつけではなく，学生たちとの協同作業・討議を通じてその成果が私の研究にも還元されるような成果が見込めるテーマを設定してきた。教員と学生の相互作用を通じて，研究自体や調査地との関係が生成・発展していくことが望ましいからである。

そうしたことから，ラジオ研究が一段落したことを受けて，2015年度からは新たに5年ほどの計画で奄美群島を対象にした社会調査を実施することにしたのである。奄美は，離島であるがメディアが多様にあふれる島である。また地域固有の自然・歴史・文化もあふれている。〈地域・文化・メディア〉をクロスさせる研究には格好の対象地であった。私が，コミュニティFM

調査でたまたま訪れたのが縁となり,「奄美におけるメディアと文化」をテーマに掲げてあれこれ研究費を獲得しながらフィールド調査を始めてから8年目のことである。2015年度は,「そろそろ学生を連れてフィールドに入っても大丈夫かな」という研究面での自信がついた時期であった。また,地域のメディアを研究している研究者としては,ラジオというメディアの業種の研究ではなく,もっと特定の地域を定め,その地域と密着した形でメディア調査教育をしたいという思いがより強くなっていたこともある。

写真1 雄大な奄美の風景と,筆者の教え子たち

2 メディア学に地域をクロスさせる調査研究

奄美群島を対象地にして始めた社会調査実習の基本テーマは,「メディアの中の奄美・生活の中の奄美――奄美イメージの研究」である。奄美イメージの研究をコンテンツ研究だけに絞るのではなく,奄美というフィールドとの対話を通じてコンテンツの解釈の幅を拡げていく。そうした大きな枠組みのもとで,毎年のサブテーマを決める。2015年度のテーマは,映画・テレビドラマ等である(ちなみに,2016年度は,奄美のうた文化の歌詞世界,2017年度は写真の中の奄美イメージがテーマである)。

私の社会調査実習の場合には,まず社会調査実習の履修者のほとんどはゼミ生であることから(制度的には,ゼミ以外の学生も履修はできる),マスコミ系ゼミの特徴が生きる調査であることが求められる。さらに,学生はフィールドに一度きり,しかも短期間しか入ることができないという制約がある。

こうした要件をどう組み合わせるかが調査実習デザインの課題となる。地域研究のゼミではないので,具体的に調査事項を決めて比較的長期(たとえば,数回にわたったり,継続して1〜2週間を費やして)に現地入りして聞き取り調査をするような,地域社会学や地理学のような本格的な地域調査は難しい。ある程度,「ゆるい」現地取材しかできない。

しかし,コンテンツ研究だけでは,記号分析に終始してしまう。たんにメディア研究をしたいだけならそれも可能なのだが,「ある地域(奄美)」をテーマに組み込んでいる以上,学生たちにはその地域のコンテクストをできるだけ理解して欲しい。それが,地域とメディアを組み合わせた研究の醍醐味となるからである。そもそも,一度も行ったことのない地域のメディア作品を想像力だけで分析して済ませてしまうとしたら,フィールド調査など不要だ。そうではなく,ある地域に立つことで感じる空気感や手ざわりが記号分析に少しでも反映されるような迂回路を経た研究の可能性があるのではないだろうか。

2015年度の調査研究は,上述したように奄美映画・ドラマの記号分析とフィールド調査を組み合わせた。社会調査実習報告書は,『映像の中の奄美・生活の中の奄美――〈奄美からのメディア社会学〉』として140部を刊行した。

奄美映画(奄美を重要な舞台とする映画)は,基本は大都市の映画メディア産業という〈島外からのまなざし〉によって,そしてその映画を

見る内地の都市的なオーディエンスという〈島外からのまなざし〉のためにつくられている。それを，理念的に南島イデオロギーやオリエンタリズムなどの視点から解釈することは容易である。ある意味では，最初にフレームありきで料理することになる。

私が目指しているのは，そうした理論的フレームからの安易な解釈ではない。地域で生きる人々の空気感，手ざわり，心情などと学生たちが対話しながら，つまり〈島内のまなざし〉に思いをはせながら，〈島外からのまなざし〉によってつくられたコンテンツを読み解いてもらうというプロセスを重視した調査研究である。

履修者は社会学の学部の学生であるので，調査者となる学生たちが，奄美という舞台の社会や暮らしのコンテクストを理解し，つたないながらも自身の奄美イメージを豊かにする。それが記号分析によるコンテンツ研究とフィールド調査を組み合わせるという私の社会調査教育の狙いである。

地域調査ではないので，本格的なインタビューは日数や準備という点でも限られている。その制約は教育調査としてある程度は割り切らねばならない。もし複数年をかけるような調査が可能なら，もっと深いインタビューを実施できるのであろうが，5泊6日（中4日）程度の滞在ではさまざまな制約がある。

理想としたのは，島の年輩の方々から過去の暮らしの姿を聞き出すことであった。急速に変容しつつあるとはいえ，今の奄美にはまだ内地の都会とは異なるさまざまな地域の人間関係や文化がある。できるだけ年齢の高い住民と接することでそうした過去の暮らしの姿を聞きだす。島のヴァナキュラーな暮らしにできるだけ多く出会う。私のゼミ生の場合，たぶん可能な到達点はそこまでということになる。そうした体験型・発見型のフィールド活動しかできないと言ったほうがよいのかもしれない。

こうした考え方，そして履修者の制約・実態のなかで設定したのが，「メディアの中の奄美・生活の中の奄美――奄美イメージの研究」である。

3 調査の内容

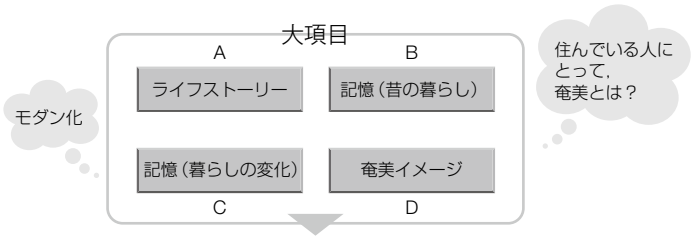
具体的な調査は，以下の3つのプロセスから構成されている。

①奄美に関する映画・テレビ番組などの映像コンテンツの内容分析

②そのメディアによって描かれたコンテンツの撮影現場を訪れる，その周辺地域に宿泊し可能な限りで奄美の人々の実際の暮らしについてのインタビュー調査を試みる

③この2つのプロセスを経て，メディア作品の物語構造を再度解読していく

作品（コンテンツ）の物語構造を解読する場合には，どれだけ距離を保って制作者のまなざしを見つめ直すのかということが重要になる。よほど気をつけないと，ストーリーの審美性（感動）に引きずられがちだからである。



●生業：何をして生計をたてていたのか？
●生活：生活の楽しみ方は？　島唄は？　相撲は？　八月踊りは？
●地縁と血縁：つきあいの濃さは？　どんなつきあいがあるのか？
●シマ意識：自分のシマと他の島の境界は？　自分の帰属意識は？
●その他：余興があったら，あれこれ。1年間の行事，ライフストーリーなど

図 調査項目

写真2 村の小さなラジオ局での取材

調査の範域・対象

奄美のメディア作品（コンテンツ）としては，DVD, VHSとして市販されている映画，ドラマ，さらにテレビ放送を録画したものを利用した。奄美映画は，沖縄映画のように多くはない。映画「島育ち」(1963) や映画「青幻記――遠い日の母は美しい」(1973) など古い作品は入手できなかったが，主な作品は入手可能であった。

現地の取材対象者は，映画やドラマの舞台として使われることの多い加計呂麻島の集落の高齢者を想定していたが，現地の学芸員から大学の学術調査などにも対応できる民泊協議会があるという情報をいただき，宿泊と取材を兼ねることにした。

現地の調査対象者が最初の想定ほど多くなかったことと，インタビューの補完というという狙いから，現地のラジオ局（コミュニティFM）を訪問し，村の暮らしについて教示してもらう懇談の機会を設けた。さらに，一部の学生は調査後も島に残り，地元のコミュニティFM局で職場インターンをすることで，島の暮らしに触れる機会を増やした。また，本調査に参加できない学生には，数日間の予備調査に同行することで，現地の理解を深めてもらった。

調査を終えての反省だか，集落の高齢者に取材する場合，集落の公民館などに宿泊し，直接区長や敬老会と交渉する必要を感じている。民泊協議会などが間に入る場合には，いくら説明してもこちらの調査意図が十分に伝わらなかったり，多忙から対応できなかったりすることがあると実感した。

調査項目

調査項目は，春学期に奄美映画をほぼ見終えた段階で，以下の2つの領域でそれぞれフレームを作成した。

①メディア作品　ストーリー分析・表象分析（言語的要素・映像的要素・音声的要素）・象徴分析をフレームとして設定

②現地インタビュー調査　生業・娯楽（島唄・相撲・踊り）・地縁と血縁・シマ（集落）意識の強さ（他

の集落＝ヨソジマと区別する自他意識）・年間行事・ライフストーリーなど

具体的には図のような問いを設定した。こうした問いを，実際の現地インタビュー用にかなりシンプルな表にして持参した。ゆったりした出会いと会話のなかで，これらの問いのなかの一部でも聞き取れればよいという「ゆるい」方針である。

結局，「調査に参加する学生自身がいかなる奄美イメージを持つのか」が肝要であり，自分たちなりのリアルな奄美イメージの醸成がない限り，コンテンツに対して距離をとることはできないと考えたからである。繰り返すが，現地調査はより厚みのある記号分析のための迂回路のような作業である。

データ収集（現地調査）の方法

①インタビュー調査　学生が2名と3名の班に分かれて，それぞれ調査対象者1名から2名をグループインタビューする方法をとった。予備調査に参加した学生が1名いるので，計6名の学生が参加したことになる。

②参与観察　すでに述べたように，インタビュー調査の不足を補うこともあり，調査終了後に2名の学生が島に残り，現地のケーブルテレビ局・コミュニティFM局にインターンという形で1週間ほど滞在し，フィールドノートを作成することで，奄美への内在的な理解を深める方法をとった。いわば参与観察のような手法で補完したのである。

調査の実施時期

予備調査　2015年7月2日（木）～6日（月）
本調査　　2015年9月3日（木）～8日（火）
（インターン学生は，15日まで）

行程

私の社会調査では，基本的に，現地集合・現地解散の方針をとっているが，今回の調査では，往路はメンバー全員が同じ交通手段で同行した。現地では2台のレンタカーでの移動となった。奄美大島は沖縄本島の6割ほどもある大きな島で，さらにその最南部にある加計呂麻島での取材ということで移動にかなり時間がかかっている。

1日目　移動：中部空港→鹿児島空港→奄美空港→宿（民泊）着
2日目　奄美ロケ地めぐり，コミュニティFMを訪問し懇談
3日目　フェリーで加計呂麻島へ。ロケ地めぐり・島文化体験・民泊で取材
4日目　加計呂麻島ロケ地めぐり・島文化体験・民泊で取材
5日目　フェリーで奄美大島へもどり，都市部である奄美市名瀬地区めぐり
6日目　移動：現地解散→一部の学生は島に残り放送局でインターン

4 研究成果の発表

学生たちは，それぞれ行程を振り返りながら，ロケ地めぐりと民泊での取材やインターンを通じて感じたことを「奄美フィールドノート――行って，見て，感じた奄美」として執筆した。執筆に際しては，コンテンツによる奄美イメージと自分が見て体感した奄美との「差異」を意識してもらった。物語に感動するのではなく，その構造に対して距離をもって読み解くには，そうした「差異」への感受性が重要であるからである。

こうしたフィールド調査を経て，秋学期から，改めて奄美映像（映画・ドラマ・番組）の分析枠組みを整理する議論を開始した。春学期では素朴に奄美映画を鑑賞したのに対して，秋学期では，報告書執筆のために，現地調査を経て獲得した少し「クール」な目線で，コンテンツの物語構造を抽出する作業をした。

記号分析枠組は，教員の側から分析枠組だけを提示し，それに基づいて各自が担当する映画やドラマを解析していく作業が開始された。私

表 島の魅力の描かれ方（島魅力の3パターン）

島魅力の3パターン※各作品が，奄美を「どんな島」として描いているのか			
	神秘（しんぴ）	故郷（ふるさと）	南国（なんごく）
3パターン	神秘の島・奄美＝奄美を神秘の島として描く物語の構造。具体的には，神・森・海・性(野生）が重要な要素となる。シャーマン(神様）の祈り，祈りのある暮らし，太古の森，台風への畏敬，荒ぶる性	故郷の島・奄美＝なつかしい日本の原郷・ふるさととして描く物語の構造。素朴な暮らしと人々のつながり，そして自然と共生する豊かな民俗文化。そこには現代社会が失った日本の原郷＝ふるさとの情景がある。	南国の島・奄美＝都会人が空想する抽象的な南の島。具体的な民俗性や固有性を消去し，抽象的で空想として描いた架空の南の島。「めがね」に描かれたのは，そうした典型的な南国，奄美，ハワイ，沖縄，バリでも構わない。
表象	ユタ，ノロ，神社，祭事，太古の深い森，台風の海，奔放な性，命宿る静かな海	島唄，島料理，島野菜，相撲，結，青年団，壮年団，海，おばあ	静かな海，健康的な料理，のんびり時間，スローライフ，たそがれ，めがね
作品例	「神々の深き欲望」「2つ目の窓」「余命」「新日本風土記・奄美」	「ジャッジ」「島の先生」「男はつらいよ」「又吉直樹，島へ行く」「死の棘」「新日本風土記・奄美」	「めがね」

映像作品によっては，2つの要素が盛り込まれているものもある。

が提示した枠組は，学生が作業しやすいように，2枠及び3要素という単純なフレームである。

①表象としての奄美枠　奄美的な記号，地域表象のこと，「奄美らしさ」の具体例→表象の3要素：言語的要素・ビジュアル的要素・サウンド的要素

②象徴としての奄美枠　記号がつくりだしているイメージ，奄美らしさの抽象的な中身，あるいは記号が描くシンボリックな世界や記号に含まれている文化的な価値など

学生たちがそれぞれ担当した映像作品を分析し，それを持ち寄ってディスカッションした。これを通じて抽出したのが，「再生(救済)の物語」という基本構造である。現代社会のネガティブな側面が措定され，そこで都会に疲れた旅人（あるいは島出身者）が，島を訪れ，島の魅力要素に出会う。それが「人生の転機」となって自己を再生していくという物語構造である。

現代社会のネガティブな側面として，3つの世界が想定されていることがわかった。

①文明・開発の世界　未開（奄美）に対する文明世界や開発者が想定されている。作品例：「神々の深き欲望」など

②都市の世界　そこでは社会問題・いじめなどの学校問題，家庭問題などが満ちている。作品例：「ジャッジ――島の裁判官奮闘記」「島の先生」「男はつらいよ 紅の花」など

③仕事の世界　多忙な仕事の世界が想定されている。作品例：「めがね」「2つ目の窓」など

そして，さらにその物語構造を「人生の再スタート」「命の継承」「主人公の成長」という3つのパターンに整理した。

①人生の再スタート　主人公がこれまでの人生をやり直す

②命の継承　生命の神秘が宿る島で，命が次の世代に引き継がれていく

③主人公の成長　少年や若者が，幼さから脱皮し，人として成長していく。性的にも大人になる

そして，その「再生」の源泉である島の魅力も3つのパターンとして描かれていた。「神秘」の島，「故郷（ふるさと）」の島，「南国」の島である。つまり，奄美を神秘の島として描くパターン，なつかしい日本の原郷・ふるさととして描くパターン，都会人が空想する抽象的な南の島として描くパターンである。

もちろん，こうした南の島の魅力要素は奄美だけではなく沖縄映画にも当てはまる。映画分析や観光表象の分析のなかでは，南の島をめぐる言説研究・記号研究の「定番」の結論なのかもしれない。

しかし，この社会調査実習では，南島イデオロギーやオリエンタリズムなどの用語をアプリオリ

に措定するのではなく，学生たち自身の語りの場のなかからそうした南島映画・ドラマの物語構造が浮かび上がってきたことは大きな成果だ。それは私のアシストを得ながらも，学生たち自身による文字通りの発見的なプロセスの結果として出てきたものである。学生たちにそうした“発見”の醍醐味を味わってもらったという点では，私としては社会調査実習の教育的な目的が達成された1年であったと考えている。

最後に，2015年度の社会調査研究の成果は，1年後の2017年3月末に私が出版した『奄美文化の近現代史――生成・発展の地域メディア学』（南方新社）の4章「奄美のメディア――島外メディア編」のなかの1つの項目「映画・ドラマにみる〈島外からのまなざし〉――奄美物語の3パターン」でも紹介した。それは，〈島外からのまなざし〉であるマスメディアが描いた奄美の物語構造について，学生たちと私が共同で整理してきた枠組である。

本のなかでは，3つの物語構造や魅力要素の発見が私と履修した学生たちの共同の成果であることを明記し，本人らの了解のもとに履修した学生たちの氏名も注のかたちで掲載した。学生の社会実習調査といえども，教員の研究と連動することで学問的な世界での研究成果として公刊できることを例示したつもりである。奄美研究では，駒沢大学の須山聡研究室（地理学）が，ゼミ生による調査を『奄美大島の地域特性――大学生が見た島／シマの素顔』として出版している（青海社，2014年）。こうした調査成果の発表の仕方には私も大いに刺激された。

また報告書は，奄美の郷土資料を扱っていることで知られている古書店「あまみ庵」（奄美市）に30部を寄贈し希望者に頒布していただいている。この他，奄美群島内の全ての公立図書館・郷土資料室・高校の図書館に謹呈して，少しでも奄美の方々の目に触れるようにしている。

文献

Boorstin, D. J., 1962, *The Image: or, What happened to the American dream*, New York: Atheneum.（星野郁美・後藤和彦訳，1964，『幻影（イメジ）の時代――マスコミが製造する事実』東京創元社。）

遠藤英樹・寺岡伸吾・堀野正人編著，2014，『観光メディア論』ナカニシヤ出版。

星野克美編，1993，『文化・記号のマーケティング』国元書房。

村井 紀，2004，『新版 南島イデオロギーの発生――柳田国男と植民地主義』岩波書店。

世良利和，2008，『沖縄劇映画大全』ボーダーインク。

多田 治，2004，『沖縄イメージの誕生――青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社。

多田 治，2008，『沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで』中央公論新社。

写真3 奄美で出会った人々と，筆者の教え子たち